

平安時代の炭を使用する墓

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 安祥寺古墓(図1-1)



写真2 上ノ段町遺跡で見つかった平安時代の墓(図1-2)

はじめに 平安時代の都である平安京には、一説によると12万人程度の人々が暮らしていたと考えられています。日々の生活の中で、新しく生まれる命があれば、病気や怪我、天命などによって失われる命もあったことでしょう。大勢の人が暮らしていましたから、毎日のように死者がいたものと思われれます。それでは死者を弔うため、平安時代にはどのような墓を造ったのでしょうか。平安京とその周辺で行なわれた発掘調査で見つかった墓を中心に、その具体的な様相を探っていききたいと思います。

墓の調査例 現在のところ見つ

かっている平安時代の墓の位置を示したものが図1です。不明瞭なものを含めると、その数はさらに多くなります。今回は調査でその構造がわかるものを取り上げました。その結果、23地点、30基ほどが見つかっています。その内訳は、平安京内で4地点、京外で19地点あり、京外で見つかることの方が多くなります。京外の例を地域別に見ていくと、洛北地域1地点、鴨東地域5地点、山科地域4地点、嵯峨地域2地点、鳥羽地域1地点、旧長岡京内に2地点、長岡京北側や西側の丘陵に4地点が確認できます。特定の地域に集

まるような状況は見られませんが、平安京東側にやや多いようです。

墓の種類と構造 京都市内の発掘調査では、土坑墓、甕棺墓、木

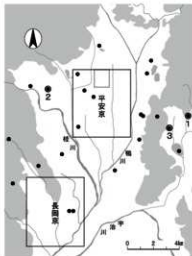


図1 平安時代の墓位置図

棺墓、木炭榑墓、木炭木榑墓、火葬墓が見つかっており、多様な種類の墓があったことがわかります。また、流路や道路側溝から人骨が出土する場合もあり、墓を造らずに死体を遺棄したと考えられる例もあります。では、それぞれの墓はどのような構造だったのでしょうか。

墓穴の中に直接遺体を埋葬する土坑墓、棺として須恵器や土師器の甕を用いる甕棺墓、木製の棺に遺体をおさめ墓穴に埋葬する木棺墓、墓穴の中に木製の榑を構築し、その中に木棺をおさめる木榑墓、木棺の外側を炭で覆う木炭榑墓、内外二重の木榑の間に炭を充填する木炭木榑墓があり、土坑墓のように比較的簡略な墓から、木炭木榑墓のような非常に労力をかけた墓まで様々です。こうした構築に関わる労力の差は、おそらく埋葬された被葬者の地位や権力、財力などが反映されているものと考えられます。

墓と炭 平安時代の墓といっても様々な種類があります。ここでは炭を使用する墓について実例を示しながら、どのように炭が使われているのかを見ていきたいと思います。

木炭木榑墓は、山科区安祥寺下寺の安祥寺古墓があります(写真1)。その構造は、墓穴を掘削した後に底に炭を敷き、その中に木棺をおさめ、その外側に二重の木榑を構築します。木榑の間には炭が充填されていました。鏡や乾漆製品、土師器などが副葬されていました。その被葬者については文徳

天皇の母であった藤原順子や後の藤原古子と見る説もあり、高位の人物の墓であることには間違いなさそうです。

次に、木炭榑墓は、山科区西野山古墓、西京区伊勢講山古墓、向日市物集女町長野古墓などがあります。3例とも偶然に見えられたため詳細は不明な部分もありますが、今回は山科区西野山古墓を取り上げてみることにします(図2)。方形の墓穴を掘削し、木棺をおさめ、周囲に炭を充填しながら埋められています。さらに上部も厚さ30cm程度の炭で覆われていたようで、多量の炭が使用されていたことがわかります。鏡や装飾が施された刀、鉄鎌などの武器類、硯、水滴といった文房具、石帯などの豊富な副葬品が出土しています。その被葬者については、坂上田村麻呂と想定されており、やはり高位の人物の墓であることは間違いありません。

最後に、木棺墓に炭を使用する例としては、右京区上ノ段町遺跡や東山区六波羅政庁跡などが見つかっています。上ノ段町遺跡例は、墓穴を掘削し、その底面に炭を敷き詰めた後、木棺をおさめ、土で埋め戻されています(写真2)。六波羅政庁跡では、2基の墓で炭の使用が見られます。両者は炭の範囲が異なっていて、1基は、墓穴の底全体に敷き詰められていたのに対し、もう1基は墓穴中央部の長さ1.4m、幅0.5mの範囲のみで見られます。このことから、後者は木棺の範囲のみに炭を敷き詰めたと考えられます。

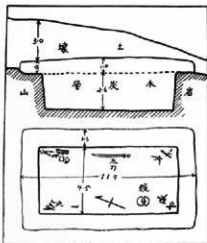


図2 西野山古墓発掘実測図(図1-3) 『京都市史蹟勝地調査報告 第2冊』 大正9年 京都市

おわりに ここまで見てきたように、炭を用いる平安時代の墓は、その使用範囲と構造から、炭が榑を構築するために使用される場合と墓穴の底や木棺の範囲といった底部のみに使用される場合の大きく2つに分けることができそうです。このような炭を墓に使用することは、『続日本後記』に記載される嵯峨上皇の遺命にある「重以棺榑、繞以松炭」に見ることができ、安祥寺下寺の例は非常に類似した構造であると考えられることから被葬者が高位の人物であったことが窺えます。一方で、炭が底部のみに使用される六波羅政庁跡の例は、複数の墓が密集し、かつ、墓の規模や副葬品などから考えると前者に比べ、下位の被葬者であったと見ることもできます。

炭を使用する範囲の違いが被葬者の階層を一定反映している可能性が浮かんできましたが、炭使用の有無の差やその理由については、触れることができませんでした。今後さらに検討していければと思います。(鈴木康高)